

私が漁師を始めたきっかけ 早田漁師塾

株式会社 早田大敷
吉田 元治

1. 地域の概要

三重県南部に位置する尾鷲（おわせ）市は、多雨地域として全国的に知られている。面積のおよそ9割は山林が占めており、海岸線は変化に富むリアス式海岸であることから、多くの集落は急峻な土地に形成されている。気候は、熊野灘を流れる黒潮の影響もあり、年平均気温は16℃以上と温暖である。この尾鷲市にある早田（はいだ）町は、尾鷲市の南部に位置する町で、高齢化率（65歳以上が人口に占める割合）が60%を超える「超限界集落」である（図1）。また、過疎も進行しており、昭和35年に678人であった人口も、現在では約150人となっている。地区にはもともと、

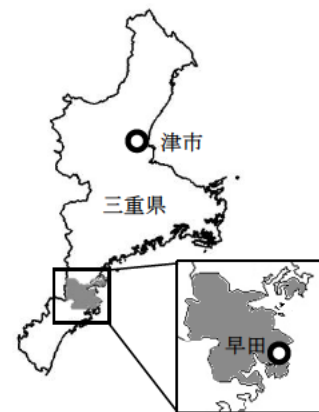


図1 早田地区の位置

行政の目の届かないところをカバーする「早田浦共同組合」という組織があり、定置網漁業を運営するとともに、祭礼行事、福祉・見守り、防災活動、伝統文化の保存などを担ってきたが、過疎・高齢化により弱体化し、現在では地区の維持存続自体が危機的状況に陥っている。このような地域の状況から、早田町では、平成21年度より「わがまち、そしてかけがえのないふるさと早田の存続に向けて」を合い言葉に、県・市・大学・系統団体の協力を得て、「ビジョン早田実行委員会」を立ち上げ、地区の存続と活性化に向け、地域の情報発信や特産品開発、伝統行事の継承、地域の担い手確保といった住民主体の取組を実施している。

2. 漁業の概要

早田町は、黒潮の流れる豊かな海を背景に、大型定置、小型定置、イセエビ刺し網、一本釣りなどの漁業の町として栄えてきた。特に早田湾口に設置されている大型定置（早田大敷）は地区の水揚げの95%以上を占めており、100年以上もの間、地域の主要産業として早田町を支えてきた。定置の経営主体が地域住民で構成される早田浦共同組合から株式会社へ移行した現在でも、その位置付けは以前と変わらない。最近20年間の株式会社早田大敷の水揚げは500トン前後で推移し、平成23年度は466トン、1億1,000万円の水揚げがあった（図2）。しかし、早田町の少子高齢化は漁業にも深刻な

影響を与えている。70歳定年制の（株）早田大敷も例外ではなく、既に乗組員不足が深刻な状況となっている。

3. 早田漁師塾開設の背景

早田町の漁業の中心的な役割を担っている（株）早田大敷では、漁業の担い手対策として平成11年度より尾鷲市主催の漁業体験教室

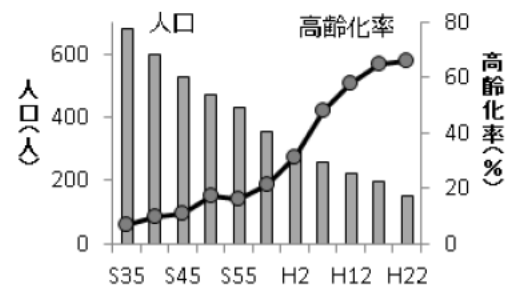


図2 早田の人口と高齢化率の推移

に協力することで、漁業に興味があり、就業意欲のある市外からの研修生の受け入れを行ってきた。しかし、当初は地域の過疎化に対する危機感はそれほどなく、地域住民が漁業体験教室の研修生と関わることは少なかった。それが、年々高齢化が進むにつれ、漁業の後継者対策を真剣に考えなければ、過疎化が加速するという危機感が地域住民の間にも強まったことに加え、前述の平成21年度から始まった町づくりの取組において、

（株）早田大敷を存続させていくことは町の存続に欠かせないという地区住民の合意形成が進んだこと等から、住民が一丸となって他地域から来た漁業後継者を受け入れようという機運が高まってきた。このことにより、平成21年度には大阪府出身の当時21歳の漁業体験教室参加者がその後の研修を経て早田に定着し、平成22年度には愛知県出身の24歳が、平成23年度には愛知県出身の16歳の若者が続けて定着することになった。

このように尾鷲市の漁業体験教室への協力をきっかけとして、地域住民にも過疎化の進行を阻止するために、後継者の確保が必要であるとの認識が生まれ、さらには「従来の行政主体の取組ばかりではなく、漁協自らが地域と一体となって、主体的に新規就業者確保へ向けた仕組みを構築していくべき」との認識が広がった。そうしたなか、平成22年度に漁協系統団体で組織された水産振興室の熱心な指導をはじめ、市や県の協力もあって、平成24年度から尾鷲漁協で早田漁師塾が開催されることとなった。

4. 実践活動の状況及び成果

早田漁師塾は、本気で漁師を目指す2~3人程度の若者に対し、4週間、漁村に住み込みで漁業の現場を体感、知識を身につけてもらう取組である。私は昨年度に漁師塾1期生として、早田漁師塾へ参加したが、その最大の動機は、この4週間という期間にあった。漁業研修制度自体はいくつか他地域でも行われているが、2泊3日程度の短期間のものが多く、本当の意味での漁村生活を体験することは難しいうえ、体験できる漁業種類も限られている。一方で、授業料はかからないものの、生活費等を実費で支払っている塾生にとって、何ヵ月にも及ぶ長期研修は経済的に厳しい。これらのことを勘案し、早田漁師塾の実施期間は4週間となっている。

漁師塾のプログラムを大きく分けると「実習」と「座学」があり、各プログラムごとに担当の講師が割り当てられている。プログラム編成やおおまかな内容は漁協内で決定

され、地域の漁業者が集まる漁業者部会（ビジョン早田実行委員会の下部組織）に諮られる。この会合では、担当講師が複数人になる場合に、塾生が混乱しないような教え方の統一や、塾生のサポート体制についての協議等も行われている。

私が漁師塾1期生として受講したプログラムの内容と、その印象を以下に記す(図3)。

1週目	日曜	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜
釣り		●	●	●	●	●	
操船				●	●	●	
ロープワーク		●	●				
オリエンテーション	●						
三重県の漁業	●						
漁村の暮らし				●			
魚のさばき方						●	
イベント手伝い							●
2週目	日曜	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜
大型定置	●	●	●	●	●	●	
資源管理		●					
養殖視察				●			
市場・流通					●		
3週目	日曜	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜
小型定置	●	●	●	●	●	●	●
刺し網	●	●	●	●	●	●	
水協法				●			
4週目	日曜	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜
小型定置	●	●				閉校式	
刺し網	●	●					
大型定置			●	●	●		
漁業者講和		●					
面談、面接				●	●		

図3 平成24年度プログラム表

【実習】

①釣り

カツオの生態や生息場所、仕掛けや餌の取扱い、天気の見方について教わりながら、実際にケンケン釣りを体験した。陸が見えないほど沖合まで出たときは、船酔いしそうであったが、魚が釣れた時はとても嬉しかった。また、漁の行き帰りには、操船技術についても少し教えていただいた。この経験は、後日、船舶免許を取得する際に大いに役立った(図4)。



図4 釣り漁業の実習

②大型定置

大型定置の網揚げ作業に同行し、網揚げから水揚げ、選別までを体験した。大型定置は早田の市場に水揚げされる95%の漁獲量を占める地域の中心的な漁業であり、地域外から早田へ来た若い乗組員が4人就業していることもあって、とても活気を感じた。和気あいあいと、息の合った作業をしている様子を見ると、この一員となって働いてみたいと感じた(図5)。



図5 大型定置漁業の実習

③小型定置

小型定置の網揚げ作業に同行し、網揚げから水揚げ、選別までを体験した。大型定置

はスケールが大きすぎて、乗組員の方々の言うとおりにロープや網をたぐるだけであったが、小型定置は規模が小さいため、定置漁業の大まかな作業の流れを把握することができた。

④ 刺し網

イセエビの生息場所や瀬の位置、網入れや網揚げ、網にかかったイセエビを外す作業等を体験した。また、「山あて」という、海の上で自分の位置を特定する手法や、天気の見方についても学んだ。闇夜の中での網揚げ作業の時は、都会では決して見られない満天の星空がとても綺麗で、とても興奮した（図6）。



図6 刺し網漁業の実習

⑤ ロープワーク

漁業者がよく使用する10種類のロープワークを学ぶプログラムである。ロープワークはすべての漁業の基礎になる技術のため、宿泊先に帰ってからも、テキストを見ながら復習を何度も行った。

⑥ ビンダマ作成

ビンダマは浮きに使われる漁具である。このビンダマを地域の方々に教わりながら作るという本実習は、地域の方々と交流ができ、思い出に残る体験となった。この際、作成したビンダマは記念に持ち帰り、今も大切にしている（図7）。



図7 ビンダマ作製

⑦ 魚のさばき方

漁業者として最低限知っておくべき技能として、魚のさばき方を学ぶプログラムである。3枚おろしや刺身の作り方の手ほどきを受けた。

⑧ 養殖場視察

成長した養殖魚を2つの生簀へ分配する選別作業や給餌作業を体験した。この養殖場での作業はとても体力のいる作業で、個人的には、すべてのプログラムの中で一番きついものであった。

⑨ イベント手伝い

尾鷲市の市場で行われた「魚まつり」というイベントの手伝いを通じて、他地区の漁業者や漁協職員、尾鷲市民と交流した。

【座学】

① 三重県の漁業

三重県内でどのような漁業が行われているのか、三重県職員から説明を受けた。

② 水産業協同組合法

漁業権や組合員資格等、漁業者が知っておくべき事項について、尾鷲漁協職員から説明を受けた。

③資源管理

資源管理の重要性について、三重県職員から説明を受けた。

④市場流通

漁獲物がどのように流通しているのか、県漁連職員から説明を受けた。

⑤漁村の暮らし

都会の常識は漁村の非常識であることも多い。そこで、都会から早田町へ来た若手の先輩漁業者から、体験談や苦労話を聞き、参考にしてもらうのが本座学の目的である。「トイレがポットンですよ」とか、「勝手に人が家に上がってきて部屋を掃除をしてくれる」とか、「良くも悪くも人の目があり、それが嫌な人には田舎生活に対応することが難しい」等、先輩漁師の方々から生の体験談やアドバイスを聞くことができ、とても参考になった。

⑥漁業者講話

尾鷲漁協の長野組合長から漁業者としての心構えや経験、体験談を聞かせて頂いた（図8）。



図8 座学の様子
(漁業者講話)

5. 波及効果

漁師塾の期間中に、講師の方々や地域の皆さんと触れ合う中で、この地域で漁業者としてやっていきたいという思いが強くなっていた私は、漁師塾終盤の進路相談の場で、(株)早田大敷の面接を受ける決心をした。そして、面接の結果、研修生として受け入れてもらえることになり、半年の研修期間を経て、この秋からは正社員として働いている。また、今年度、漁師塾を卒業した1名の若者も、私と同様に、現在、早田大敷で研修生として働いている。このように、平成21年から毎年、若者が早田町で漁業者として就業しており、彼ら若手漁業者が中心となって、藻類養殖や貝類養殖などの副業的漁業を試みるといった取組も始まっている。さらに、その兄弟夫婦が漁業者となるために移住してくるなど、着実に早田町は活気を取り戻しつつある。今後、若い発想力や機動力を生かし、地域の情報発信や特産品開発を進めるとともに、伝統行事の継承にも取り組みたいと考えている。

6. 今後の課題や計画と問題点

漁師塾のプログラム内容は今年度、さらにブラッシュアップされ、取組自体は毎年続けていくことができる体制が整った。その一方で、新たに以下の課題がみえてきた。

①個人漁業者としての独立するためのフォロー

漁師塾卒業後に、刺し網などの個人漁業者として、すぐに独立することは、技術的にも経済的にも非常に難しい。そのため、現実的には、個人漁業者として独立したい場合でも、まずは大型定置のような会社に就職し、技術を身につけ、お金を貯めるのが最適だと思われる。そこで、漁師塾としては卒業したら終わりではなく、その後のフォローもしっかりやっていく仕組みが必要である。具体的には、大型定置が操業しない夏場や

空き時間を利用し、一本釣り等の実習を企画することで、個人漁業者として独立するためのスキルアップをフォローするといった取組を行う必要があると感じている。

②大型定置若手乗組員の技術継承・向上のサポート

多くの大型定置では高齢化が進行しており、年配乗組員から若手への技術継承の時間があまり残されていない。このため、若手乗組員が効率的に技術を身につけることができるよう、大型定置の技術継承や向上のための勉強会や先進地視察に取り組むことが必要である。

上記の課題を克服することで、早田漁師塾が、都会の若者が漁師になるきっかけの場としてだけでなく、若手漁業者を地域の担い手として育成していく場になれば、さらに漁師塾の活動の幅が広がっていくのではないかと考えている。

早田漁師塾の現在の体制は、塾生を2～3名程度受け入れるものであり、漁業者の爆発的な増加につながるものではないが、少しずつでも着実に漁業の後継者を確保するとともに、この漁師塾のような取組が、県内津々浦々での取組の“いしずえ”になるのであれば、たいへん嬉しいことである。今後は、私が先輩漁師の方々に支えてもらってきたように、私自身も後輩の面倒をみていきたい。